第２章
千代田区における過去の自然災害記録の教材化とワークショップの実施

第１節　天和の大火について

水田 瑠奈（共立女子大学大学院）

はじめに

現代の日本において、地震や津波、台風等の自然災害の発生は珍しいことではなく、災害大国と呼ばれることが多い。諸外国に比べ、日本は自然災害が発生しやすく、その被害も大きいものである。災害のサイクルは人間の営みよりはるかに長いものであり、その中でも、江戸時代は大災害が集中した日本史上でも稀な時期である。江戸を大きく焼失した明暦の大火、安政の大地震、富士山噴火、度重なる飢饉等は現代の我々にも語り継がれている。当時の人々は頻発する大災害下をどのように生き抜いてきたのか、過去の災害記憶を辿ることは、今を生きる我々にとって必要不可欠なことである。そこから教訓を学ぶと同時に、過去の災害を風化させないためにも、今回は江戸時代の火災、天和の大火について取り上げる。この大火はお七火事ともいわれ、史実と作品の二面性を持ち合わせる江戸火災史においても重要な火災である。

過密都市・江戸

「火事と喧嘩は江戸の華」といわれるように江戸が火災の多い都市であったことはよく知られている。また、江戸の多くの住宅が「焼家」と呼ばれる粗末な木造建築であり、人口も多く、慶応元年(1865)の麹町一二丁目では、一平方キロメートルあたり 60,459 人、四谷伝馬町新 1 丁目では、68,024 人もの人々が暮らしていたとされる。神田松田町(現在の千代田区鍛冶町 2 丁目)では、三、四坪といった零細規模の裏店を居住とする者が、同町世帯数の約半数を占めており、超過密地域であったことがわかり、一度火の手が上がると、大火になる可能性が高かった。火災が集中して発生した季節は、暖房の必要な冬場であったが、関東地方は地震も多く、年間を通じて火災の危機にさらされていた。

天和の大火

天和 2 年(1682)12 月 28 日、5 代将軍の頃に発生した江戸の大火である天和の大火は、駒込の大円寺(現在の文京区向ケ丘)の庵室から出火し、午前 11 時から翌 29 日の早朝 5 時ごろまで延焼し続けた。大円寺が駒込に移ったの慶安 2 年(1649)であり、本尊は釈迦如来、一尺七寸の木造坐像であった。境内には、陳守の秋葉社と二つの塔中、月岑庵と大竜庵があり、そのどちらから失火したのかは不明である。本堂や庫裏は無事であったが、隣接の同心屋敷に火が移ったとされる。火の手は東、下谷、浅草、南本郷、日本橋、神田、隅田川岸にも火は押し寄せ、飛び火は南下し、隅田川を超え、深川にまで広がり、俳人・松尾芭蕉の庵もこの大火により類焼した。江戸の大火は、その季節に東北風の多い関係で、この風に煽られることが多く、飛び火は免れなかった。明暦の大火から 25 年目にあたる天和の大火であるが、被害としては、大名邸宅 75 戸、旗本屋敷 166 戸、神社 47、寺院 48、町屋延 3 里 16 丁、死者 3500 人余りとし、牛馬の死傷も相当な数であったとされる。江戸の大部分を焼失したものの、焼失町 934 ヵ町、死者数 10 万人にも及んだとされる明暦の大火と比較すると、この大火の焼死者は少なかったが、江戸の町はその後も大火に見舞われた。

天和の大火後の防火対策

江戸市政において、最も大きな問題は火災対策といえるほど、江戸市民は火災に悩まされた。江戸に住

む以上、年に一度くらい焼け出されるのは当然のことであった。明暦の大火後、市街の再建計画は江戸地域を大きく広げた市区整理が強制的に行われたが、天和の大火においてもそれは同様で、区画整理や道路拡張、火除地・町火消しの設置など消防制度、防火対策が行われた。職人たちにとって、一度大火があれば、三年食えるくらいの職であったされ、稼ぐため火付をする者もいたということから、火気取締りや火付け犯人の厳罰等、治安面でも防火に力を注いだ。

天和の大火後、神田北岸一帯に空地を作り、筋違橋内外の広場を拡大（**図１**）、須田町、昌平橋、とその町屋を取り払い、これを第一線防火線として町屋上地を作った。さらに、神田橋とその防火堤に沿って、神田の龍閑町・橘町から浅草橋門内にかけて俗に神田八ヶ所火除地と呼んだ防火地帯が設けられ、これは防火の南下を防ぐ、第二防火線とされた。同時に神田橋外の佐竹邸、橘町（現在の中央区）の松平邸、千駄ヶ谷の内藤邸、青山の青山邸等を収公し、浅草橋門外にあった寺院を江東、駒込方面へ、湯島にあった寺院を駒込、谷中、新鳥越、下谷龍泉寺町（現在の台東区）へ、牛込の寺院を四谷へと数々の寺院の移転が行われた。市内各地の大名屋敷約 27 万坪を撤去させ火除地とし、日本橋のような目抜きの場所にも一時設けられ、市民の生活の妨げにもなった。現在の神田錦町、一ツ橋一帯にあった大寺院「筑波山護持院元禄寺」は、1717 年（享保 2）の大火により焼失、跡地は火除地として広大な空地「護持院ヶ原」となった。元禄に至っては、武家地が中心より外に広がり、人家はますます増え、深川、小石川、本所、牛込、市ヶ谷等も賑わいを見せた。

その後も江戸の大火は続いたが、破壊消防が主で、広場、新道を作って、飛び火を防ぐより方法がなかった。強制的移転が多発し、町屋の発展を妨げるものも少なくはなかったとされ、享保頃になると、下町などに防火土手を築くといったことが行われる程度になった。

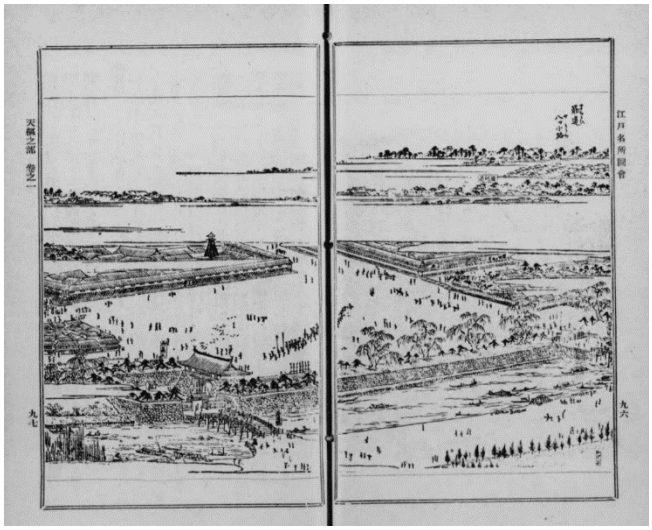

図１　筋違橋門付近の様子

（斎藤幸雄 編『江戸名所図会１』有朋堂書店、1922 年）

今も神田に伝わる「旭町」

寛永年間（1624～1644）において、現在の内神田（千代田区）は能楽師幸若太夫と出羽秋田藩藩主佐竹義宣の屋敷地であった。その後、天和２年（1682）の天和の大火により、焼け野原となり、佐竹氏の上屋敷は焼失したが、下谷三味線堀に移った。跡地は町人地として、新革屋町代地、永富町二～四丁目、元乗町代地の一部となり、明治２年（1869）に「旭町」として改名された。「旭町」という名前は佐竹家の紋である「五本骨の扇に月」が由来とされているが、昭和 41 年（1966）に住居表示が実施されると、「旭町」は内神田二丁目と三丁目の一部となり、その名前は地図から消えてしまった。しかし、現在も、内神田の神田駅西口商店街の一角には、「佐竹稲荷神社」が残っている。また、下谷七軒町の上屋敷跡には「佐竹商店街」の店が並び、今も佐竹の名が伝えられている。

また、神田旧佐久間町一帯は、「悪魔町」と称されるほど火災がよく発生した地域でもある。年に一度くらい焼けるのが当たり前といった状態であり、江戸に住む以上火災の難は逃れられないほどであった。

お七火事

天和の大火はいわゆる「八百屋お七」の物語の発端になったものである。この物語はお七はこの火災により、家を焼け出され、親とともに正仙院に避難した。（この寺については諸説ある）その寺での避難生活の際に、お七は寺小姓生田庄之介と恋仲になる。家に戻った後も、庄之助への恋しさのあまり、また火事があれば庄之介に会えると思い込み、会いたい一心で放火した（**図２**）。この放火は天和 3 年(1683)3 月 2 日の夜のことであった。火は消し止められたが、お七は放火の罪で逮捕された。江戸市中の日本橋、昌平橋(くずれ橋)等の 5 ヵ所で晒され、市中引廻しの後、鈴ヶ森刑場で火炙りの刑に処せられた。このことから、天和の火災はお七火事とも呼ばれるようになった。

貞享３年(1686)に、井原西鶴が『好色五人女』で八百屋お七を悲恋物語として取り上げたことで、お七の存在を広く知られるようになった。お七に関する歴史的な資料はほとんど確認できなかったが、この物語は歌舞伎や浄瑠璃などの芝居の題材となるだけでなく、浮世絵、日本舞踊、小説、落語、演劇等、多様な形で現在にも語り継がれている。（**図３**）

図２　放火した町を見渡すお七

（月岡芳年《松竹梅湯嶋掛額》1885 年）

最後に

今回は、1682 年に発生した天和の大火について取り上げた。

その後も江戸では、八百屋お七が処刑された天和 3 年(1683)から元禄 15 年(1702)までの 28 年間で大小を合わせて、58 件の火災が発生したとされ、当時の防火対策をみても、町の発展も鑑みた、火災に対する工夫が伺える。また、「宵越しの金を使わぬ」ことが江戸っ子の誇りの一つとされているが、そこには「金を持っていても意味がない」「いつ焼けるかわからないのなら、今日使ってしまおう」と災禍を生き抜く諦観すら感じられる。「憂き世」を「浮き世」として捉える江戸っ子ならではの言葉なのではないだろうか。

度重なる火災に見舞われた江戸市政であるが、天和の大火は明暦大火と比較し、被害は少なかったものの、現代の地名にも由来が残っており、共立女子大学が現在位置する神田も火除地として活用されていた。八百屋お七においても同様で、文学、歌舞伎などの諸作品の主人公にもなっており、当時から約 350 年経った令和でも名を残している。

江戸の災害は、現代を生きる我々と関係ない疎遠のものにも考えられるが、過去を遡り、分析することで、接点を発見し、現代に繋がる点も見えてくる。また、現代の建築、生活様式は、当時と大きく異なっており、天和の大火も災害史の一部に過ぎない。これを以って過去の災害教訓を網羅できるわけではな

いが、災害大国で生きる我々にとって知識の集積には極めて重要なことである。現代の生活の基には、当時の人々の知恵と教訓があり、過去の災害から知識と学びを得ることが、将来、起きうる自然災害に備えるための有効な手段であると考える。

図３　演劇での八百屋お七

（歌川豊国《八百屋お七》ト山口、1857 年）

参考文献

・石井隆『消防史話』（葵出版、1962 年）
・井原西鶴『好色五人女 現代語訳付き』（角川学芸出版、2008 年）
・小沢詠美子『災害都市江戸と地下室』（吉川弘文館、1998 年）
・小嶋倢岳『徘徊松尾芭蕉伝』（研吟会、1923 年）
・川崎房五郎『江戸わがふるさと』（ぎょうせい、1980 年）
・川崎房五郎『文明開化東京：明治東京史話新話』（光風社、1984 年）
・黒木喬『お七火事の謎を解く』（教育出版、2001 年）
・『静岡市消防統計書 昭和 24 年度』（静岡市消防本部、1950 年）
・『静岡県消防のあゆみ』（静岡県消防学校、1981 年）
・『千代田区史上巻』（千代田区、1960 年）
・『千代田まち事典―江戸・東京の歴史を訪ねて』（千代田区区民生活部、2005 年）
・東京都都市計画局防災計画部再開発計画課『東京都における市街地再開発事業の概況』（東京都都市計画局、1987 年）
・『都市計画概要 1976 年版』（東京都都市計画局、1977 年）
・西村祝一『郷土物語 火と水との戦い』（郷土物語火と水との戦い刊行会、1966 年）
・『日本橋区勢要覧 第 6 回(昭和 12 年)』（東京市日本橋区、1937 年）
・丹羽みさと『八百屋お七論 近代文学の物語空間』（新典社、2020 年）
・野村兼太郎『江戸(日本歴史新書)』（至文堂、1958 年）
・野村兼太郎『徳川封建社会の研究』（日光書院、1941 年）
・畑市次郎『東京災害史』（都政通信社、1952 年）
・『深川区史 上巻』（深川区史編纂会、1926 年）
・『文京区史 巻 2』（東京都文京区、1968 年）
・本郷区『本郷区史(東京都旧区史叢刊)』（臨川書店、1985 年）
・南和男『江戸っ子の世界』（講談社、1980 年）
・森銑三 野間光辰 朝倉治彦『新燕石十種 第七巻』（中央公論者、1982 年）
・斎藤幸雄 編『江戸名所図会 1』（有朋堂書店、1922 年）

図版出典

国立国会図書館デジタルコレクション https://dl.ndl.go.jp/pid/964491（参照 2023-02-02）
・歌川豊国『八百屋お七』（ト山口、1857 年）
国立国会図書館デジタルコレクション https://dl.ndl.go.jp/pid/1301650（参照 2023-02-02）
・月岡芳年『松竹梅湯嶋掛額』（1885 年）
国立国会図書館デジタルコレクション https://dl.ndl.go.jp/pid/1307846（参照 2023-02-02）

第２節　千代田区における過去の自然災害について―関東大震災 100 年―

近藤　壮（共立女子大学 文芸学部）

はじめに

2023 年（令和 5 年）は、1923 年（大正 12 年）に発生した関東大震災からちょうど 100 年目にあたる。関東大震災は、言うまでもなく日本の災害史において甚大な被害をもたらした自然災害である。死者・行方不明者は 10 万人を超えた。発生日である 9 月 1 日が「防災の日」として定められ（＝「政府、地方公共団体等関係諸機関をはじめ、広く国民が台風高潮、津波、地震等の災害についての認識を深め、これに対処する心構えを準備する」〈1960 年・閣議決定〉）、防災の啓発を目的とした日となっているように、関東大震災は、将来起こりうる自然災害に直面する私たちに多くの示唆や教訓を与えてれる。

ここでは、関東大震災、とくに千代田区域における被害の状況をまず知ることからはじめ、その記録と記憶をひも解きながら、その教訓を情報として集積し、防災意識を高めることとしたい。そして、そこから何を学び、どのように未来に繋げていくべきか、ということを考えたい。

関東大震災（1923 年）

まず関東大震災の基本データをおさえておこう。

発生日時：1923 年 9 月 1 日午前 11 時 58 分
震源：相模湾周辺
地震の大きさ：マグニチュード 7.9
津波：震災 5 分後に静岡県熱海市で最大 12 メートルを記録
被害：死者・行方不明者 10 万 5 千人前後、負傷者 10 万人以上、東京府（東京都）や神奈川県を中心に、25 万戸以上の家屋が全壊、半壊の被害を受けた。また 44 万戸以上の家屋が火災により焼失した。

関東大震災は、1923 年（大正 12）9 月 1 日 11 時 58 分に、相模湾北西部を震源とするマグニチュード 7.9 と推定される地震である。この地震により、東京都、埼玉県、千葉県、神奈川県、山梨県で震度 6 を観測したほか、北海道道南から中国・四国地方にかけての広い範囲で震度５から震度１を観測し、10 万棟を超える家屋が倒壊した。また、発生の時間が昼食の時間帯と重なり、火を使っている人が多かったことから、多くの火災が発生し、大規模な延焼火災に拡大した。この地震によって全半潰・消失・流出・埋没の被害を受けた住家は総計 37 万棟にのぼり、死者・行方不明者は約 10 万 5000 人に及ぶなど、甚大な被害をもたらした。

図1 「廣野原となった神田」
（『大正十二年 大震災記念写真帖』山田商店、1931 年より）

表１　大震災・被害比較

	関東大震災	阪神・淡路大震災	東日本大震災
発生年月日	1923年9月1日　AM11:58	1995年1月17日　AM5:46	2011年3月11日 PM2:46
地震規模	マグニチュード7.9	マグニチュード7.3	マグニチュード9.0
死者・行方不明	約10万5千人	約5,500人	約1万8千人
災害関連死	―	約900人	約3,800人
全壊・全焼住家	約29万棟	約11万棟	約12万棟
経済被害	約55億円	約9兆6千億円	約16兆9千億円
当時のGDP	約149億円	約522兆円	約497兆円
GDP比	約37%	約2%	約3%
当時の国家予算	約14億円	約73兆円	約92兆円

（内閣府・防災情報ページ：https://www.bousai.go.jp/kantou100/index.html　より）

表１は、関東大震災と近年の大震災との被害の比較である。関東大震災の被害規模について、死者・行方不明者の数の多さに驚かされるとともに、当時の経済被害のＧＤＰ比でも、阪神・淡路大震災と東日本大震災の比率を大きく引き離すほどの損失を被ったことがわかる。

千代田区における被害状況

内務省社会局『大正震災誌』（1926年）によると、東京府（東京都）、神奈川県、埼玉県、千葉県、茨城県、栃木県、群馬県で死者9万1,344人、行方不明者1万3,275人、重傷者1万6,514人、軽傷者3万5,560人、被害を受けた世帯数69万4,621世帯、罹災者数約340万人にのぼった。千代田区域（麹町区・神田区）の被害については、麹町区では死者95人、行方不明者42人、神田区では死者1,055人、行方不明者464人となっている。罹災人口の割合としては、麹町区で69.9%、神田区では91.3%にも及んだ。とくに火災の被害が甚大であり、家屋の全半焼した世帯の割合は、麹町区で55.9%、神田区では89.4%にも及んでいる。

図２「警視庁の残骸並に附近」(「震災絵はがき」より)
1923年（千代田区霞が関2-1-1).

子どもたちの震災の記憶

未曽有の大災害である関東大震災について、当時の子どもたちの目にはどのように映っていたのだろうか。『東京市立小学校児童震災記念論集』(『新編 千代田区史 通史編』〈東京都千代田区、1998年〉所収）からいくつか拾って見ていきたい。

「私が学校から帰ってご飯をいただかうとすると「ゴー」といふ音「オヤ」風かしらと思ふ間もなくぐらぐらっと大地震。私はおどろいてお父さんとお母さんと三人ではだしのまま大通りへと飛び出した。

大通りには近所の人が一ぱい一かたまりになってしゃがんでゐた。私たちも其そばへいって皆にかたくつかまった。」（神田区西小川尋常小学校３年　勝見セイ）

「日鼻さんのおぢさんがはだかでとびだして僕の姉さんを助けやうとしてとたんでけがをしました、僕は宮川さんの家に屋根にのってふるへてゐますと、お母さんが病院から帰って来て僕を電車道へ出してくれました、其のうちに内のとくざうさんがはりを折って姉さんを助けてくれたので三人で水道橋ににげました。」（神田区西小川尋常小学校３年 並木八郎）

「消防ポンプは皆宮城へ宮城へと行って消さうとはしない。火の手は盛んになるばかり。（中略）裏の方がどんどん燃えてゐた。近所は、煙がどんどんくる。私はこれがなつかしい我家の見をさめであるかと思ふと悲しくなった。」（神田区橋本尋常小学校６年　小林繁吉）

「上野の方へ行きませうと思ってかじ町の角で出ましたら大変風が吹いて来ました。空の方から大きなとたん板がとんで来ますし、ねえさんや私の着物のそでへ火の粉が飛んで来ましてもへだしましたからお父さんお母さんでもみけして下さいました。」（神田区千櫻尋常小学校３年　鈴木富子）

「そのうちに、するがだいの方から、病気の人をねだいの、うえへのせて、にげて来る人もあり、車に荷物をたくさんつんでにげて来る人もありました、又子供がおばあさんに、手をひかれて二人ともせ中にふろしきづつみをせおって行くのはずいぶんかはいさうでした。」（神田区淡路尋常小学校３年　小山武三郎）

「どちらへにげればよいかと考へていますと、お巡りさんが来て「どちらへでも火のない方を見て安全な公園へ逃げなさい」と教へて下さいました。それでこみ合ふ中を苦しい思ひをして五時頃丸の内に着きました。此の間四時間余りもかかったのでお腹がすいてへとへとになりましたが食べるものもなし、それかと言ふて飲むものも無いので、それが何よりつらいと思ひました。（神田区今川尋常小学校四年　上谷松夫）

「はぐれてお母さんのことを考へるともう心配でなりませんでした。あたりはあくまの如くぐれんの焔が空を囲んでゐるのでした。私はそれをぼうぜんと見てゐましたがいつしか熱い涙が流れ出るのでありました。時々なま暖かい気持ちの悪い風がほふをかすめて行くのでした。其の晩はかやうになさけなく食物もたべないで夜を泣きあかしました。」（神田区神龍尋常小学校５年　萩田はな）

「やがて十一時になったが最初のやうな大きいのはこなかったが、絶えずいろいろと地鳴りがして、それはそれは気味が悪い。今にもぐらぐらとすごいのが来るやうな有様である。軽い地震は三分置きか五分置き位に揺れる。」（麹町区富士見尋常小学校６年　岩崎之隆）

これらの当時の子どもたちの目に映った関東大震災の記憶は、今から 100 年前に千代田区内で紛れもなく起こったことであるということを、私たちの心に刻んでおきたい。

パネル展「関東大震災 100 年」の試み

共立女子大学で初めて行うＫＵＧ（2023 年 3 月 10 日実施）にあわせて、関東大震災の記念絵葉書の中から、千代田区域内の様子を写した写真をピックアップして、パネル展「関東大震災 100 年」を開催した。

関東大震災の記念絵葉書は、震災直後の 1923 年から相当数発行されている。甚大な被害を受けた様子、ときには目を覆いたくなるような悲惨な場面を写した写真が絵葉書として一般大衆に流通するという感覚は現代のそれとは異なるものといえる。それは、一つに現代と当時のメディアの違いということが大きいだろう。100 年前の当時は、現代のようにテレビやインターネット、SNS などの情報伝達手段はもちろんなく、絵葉書という媒体を通して、文章ではなく、写真というヴィジュアルコンテンツで人々に震災の現状・情報を伝達するという役割を担っていたといえる。

展示では、震災の記念絵葉書から千代田区に関わりのある 13 枚を選び、それを A1 サイズに拡大、解説を添えて、パネルを作成した。またあわせて、『関東大震災画報：写真時報』（東京写真時報社、1923 年 10 月）から東京の焼失区域を示したパネルを作成して展示した。

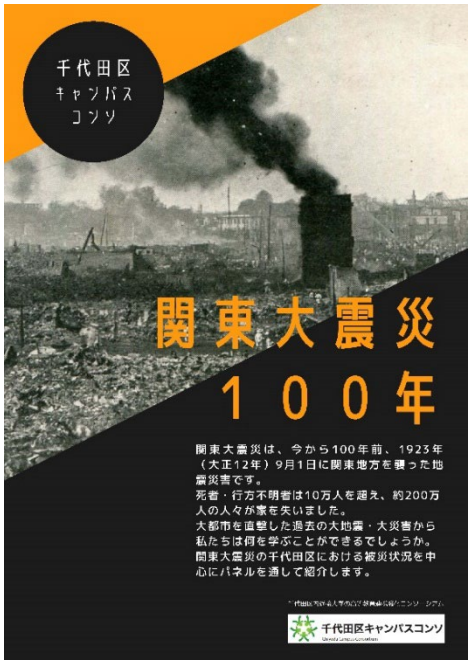

図 3 「関東大震災 100 年」展示ポスター

図 4 「関東大震災 100 年」展示パネルの一部

図 5 パネル展示 「関東大震災 100 年」の展示の様子（共立女子大学 2 号館、2023 年 3 月 10 日）

参考文献

・『関東震災画報』第 1～3 輯、大阪毎日新聞社、1923 年
・『関東大震災画報：写真時報』東京写真時報社、1923 年 10 月
・『大正大震災写真帖』報知新聞編輯局、1923 年
・『大震災写真画報』第 1～3 輯、大阪毎日新聞社、1923 年
・「震災後の一年間」『大阪朝日新聞』1924 年 9 月 15 日
・『大正十二年 大震災記念写真帖』山田商店、1931 年
・『新編 千代田区史 通史編』東京都千代田区、1998 年
・『（財）東京市政調査会市政専門図書館所蔵　関東大震災に関する文献目録』（図書編 雑誌編「都市問題」掲載編）（財）東京市政調査会市政専門図書館、2005 年 1 月

第３節 千代田区の災害に関するウィキペディア記事執筆ワークショップの実施

谷島 貫太（二松学舎大学 文学部）

１．はじめに

ウィキペディアタウンと呼ばれる、オンライン百科事典Wikipediaを活用したワークショップが存在する。これは、地域の文化財や史跡を対象とし、グループでウィキペディアの記事を執筆・編集していく試みだ。実施の形式にはバリエーションがあるが、多くの場合では、実際に街歩きをしながら取材を行い、また文献資料を読み込みつつ記事を書き上げていく。この作業を通して、その対象についての深い知識を身につけていくことができる。加えて自身の作業がWikipediaの記事として公開されることで、その対象について一種の愛着とまた責任感のようなものも生まれる。ほかにもさまざまなメリットが存在するが、ウィキペディアタウンは総合的な学びの機会として注目を集めており、コロナ前には毎週日本のどこかでこのワークショップが開催されるという状況にあった。

二松学舎大学文学部都市文化デザイン学科の谷島貫太ゼミでは、2022年度千代田学「自然災害発生時における大学を拠点とした帰宅困難者支援に関する研究」の一環として、「災害」をテーマとしたウィキペディアタウンを実施した。千代田区内の災害に関連するトピックのウィキペディア記事執筆を通して、災害についての学びの機会を生み出していくのが狙いだ。本章では、2023年2月4日に実施されたワークショップについて報告していく。

１－１.ゼミとウィキペディアタウン

谷島ゼミでは、2018年度からゼミの活動としてウィキペディアタウンを実施してきた。今年度の活動の報告に入る前に、まずはそこにいたる経緯を簡単にまとめておく。

地域の文化財について一定以上の質のウィキペディア記事を書き上げるには、さまざまなスキルが必要になる。資料を読み込み、重要な情報を取り出して、対象に合わせてバランスのよい記事構成を考え、簡潔で的確な文章を執筆する。これらを可能とするスキルは、大学生が学びを進めていく際にも必須のものだ。もちろんそれだけではない。記事対象の写真を撮影し、ウィキメディアコモンズにアップロードしてウィキペディアの記事に取り込むには、当然一定以上のIT リテラシーが求められるし、著作権の知識も押さえておかなければならない。またキャンパス周辺の文化財を対象とすることで、大学がある地域についての知識を深めることができ、さらには一般参加も可能とすれば地元の方々との交流の機会ともなりうる。加えて、現代の学生の学習過程において、ウィキペディアは避けては通れない存在だ。現代社会における知識流通のインフラに近いサービスであるウィキペディアに対しては，たんに利用を禁じてしまうよりも、どのような距離感で付き合っていくべきかというリテラシーをしっかり身に着けるほうが望ましい。実際にウィキペディアの記事執筆のプロセスを詳しく知ることによって、学生たちがウィキペディアをめぐる基本的なリテラシーを身に着けることができる。ウィキペディアタウンは、大学生にとって総合的な学びの機会となりうるのだ。

ただしウィキペディアタウンに主催者、運営者としてかかわるとなると、まったく別種の、しかしとても貴重な経験を積む場ともなる。主催者はワークショップで扱うトピックを選ぶところからはじめなければならない。そのためには、当該地域についてある程度は詳しくならなければなら

ず、準備のためにいろいろと歩き回ったり図書館で資料を漁ったりする必要が出てくる。また、参加者を集めるための広報もしなければならない。そうなると、ワークショップの意義ついても説明できなければならない。また準備を進めるなかで地域の方に協力を仰いでいこうするならば、地域とのかかわりも必然的に生まれてくる。谷島ゼミでは、たんにウィキペディアタウンに参加するだけではなく、その実施・運営を学生が担っていくことで、地域の発信と地域との関わりを主体的に生み出していく機会としてきた。

２．災害とウィキペディアタウン

2018 年度から開始したウィキペディアタウンの試みは、2020 年度以降、コロナの感染拡大を受けて休止となった。感染状況もある程度落ち着いてきた 2022 年度に、千代田学採択事業「自然災害発生時における大学を拠点とした帰宅困難者支援に関する研究」に加わる形で、今度は「災害」をテーマとしたウィキペディアタウンを実施することとなった。

ウィキペディアタウンを実施するにあたって、最初に重要となるのが記事執筆対象として取り上げるトピックの選定だ。この選定にあたっては、１）まだウィキペディアの記事が存在しておらず、２）独立した記事として取り上げる価値があり、３）記事執筆にあたって十分な文献資料を利用することができる、という条件を満たす必要がある。多くの重要な歴史的文化財にはすでに記事が存在しており、また興味深い文化財であっても関連資料を見つけられないものについては記事を書くのが難しい。ウィキペディアタウンにおいては、丁寧に出典となる資料を示しながら記事を書いていくことが求められる。

検討の結果、次の二つのトピックを取り上げることとした。一つは淡路公園。秋葉原駅とお茶の水駅の中間あたりに位置し、現在では大規模商業施設のワテラスに併設される形となっているこの公園は、関東大震災後に復興小学校として再建された淡路小学校に併設する復興小公園と呼ばれるものからはじまった。その歴史を調べていくことで、災害の記憶をある形で掘り出すことが可能になるはずだという見込みだった。併せてこの公園の敷地のある場所は、現在の開成中学校・高等学校の発祥の地でもあり、「開成學校発祥の地」という石碑も置かれている。この点でも広がりのあるトピックになると考えられた。もう一つは南明館。南明館は、いまも千代田区小川町にある五十稲荷神社の隣にあった、明治から大正にかけて存在していた勧工場（デパートに類似する小売商業施設）である。南明館の歴史をみていくと、前身となる洽集館（こうしゅうかん）が明治 25 年の神田の大火によって焼失した後に再建されたことがわかる。神田地区は歴史的に繰り返し大火の被害に遭ってきており、この南明館を通してこの地域の火災の歴史を掘り出せるのではないかと考えた。

２－１. 資料調査

資料調査は主に千代田区の千代田図書館で行ったが、一部の資料については日比谷図書文化館および国会図書館を利用した。本番での作業のために用意した資料のリストを本章末尾に掲げる。ここではその内容をかいつまんで紹介する。

淡路公園については、資料は大きく４つのグループに分類できる。１）現在の淡路公園に直結する再開発に関するもの、２）関東大震災からの復興に関するもの、３）淡路小学校に関するもの、４）開成中学校に関するもの、である。資料調査を進めていくなかでの最大の発見は、千代田図書館に所蔵されていた、淡路小学校関係者が編集した記念集の類だった。淡路公園を横にみながら淡路小学校で学んでいた小学生たちの学校生活が活き活きと記録されていたのと同時に、その場所や周辺地域に

関する歴史的背景についても非常に幅広くまた詳細にまとめられていた。ただ、今回は「淡路小学校」ではなく「淡路公園」が主題であったので、取り上げたくても取り上げられなかった情報も多かった。日比谷図書文化館の特別研究室に眠っていた『復興新築校舎落成記念』という写真集も、再建直後の淡路小学校の様子や各教室内部の真新しい姿を記録していて非常に印象深いものだったが、記事には反映できなかった。

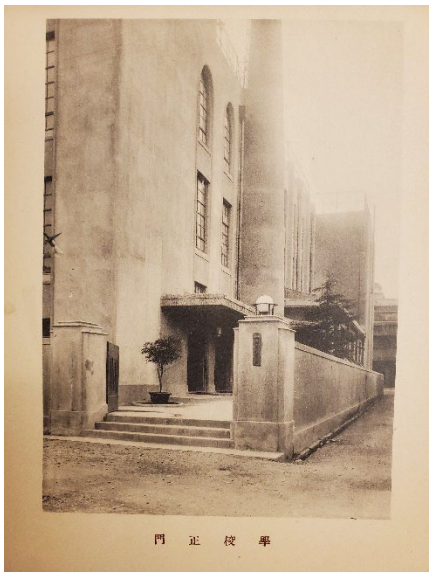

図１　淡路小学校学校正門
（『復興新築校舎落成記念』）

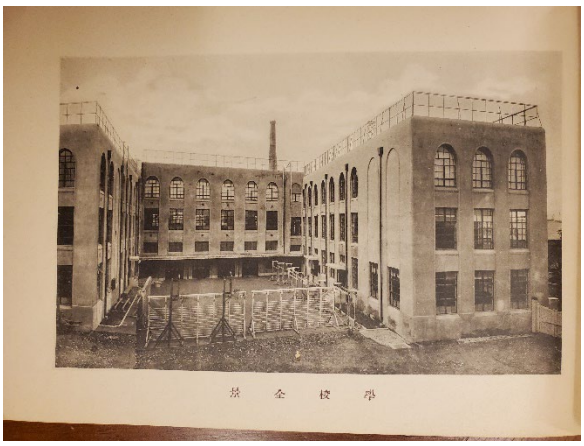

図２　淡路小学校学校全景（同）

図３　再建された淡路小学校の普通教室の様子（同）

図４　同、唱歌教室の様子（同）

また開成中学校の校史を繙いていくと、関東大震災によって崩壊した校舎を前に呆然とたたずむ学生たちの姿が生々しく描き出されており、災害をテーマとした今回のワークショップではぜひ取り上げたいものではあったが、同様に扱うことはできなかった。

南明館については、資料は大きく５つのグループに分類できる。１）前身となった洽集館に関するもの、２）火災による焼失後に再建され改名された南明館にかんするもの、３）洽集館、南明館にも縁のあった樋口一葉に関するもの、４）南明館が貸席（レンタルイベント会場）として衣替え

をしてできた南明倶楽部に関するもの、５）南明倶楽部のあとに映画館となってできた南明座にかんするもの、である。これらの資料を調べていくなかでの最大の発見は、洽集館を焼失させることとなった火災がもたらした被害の詳細であった。明治２５年の神田大火によって全体で 24 名の犠牲者が出たが、実にそのうちの 18 名が洽集館で生じた被害者であった。調べていくと、その甚大な被害がきっかけとなって、非常口の設置や避難経路の確保などを定めた商業施設に関する新しい法律がつくれたという事実も分かった。さらに『風俗画報』の明治 25 年に刊行された号の中に、洽集館での火災を取り上げた記事を見つけた。そこには、火災でなくなった 17 名の実名と住所（加えて宿所姓名不詳１名）が記載されており、併せて洽集館での火災の様子を描いた残酷かつ生々しいイラストをみつけて衝撃を受けた。

図５ 洽集館焼失の図（東陽堂『風俗画報』（41））

洽集館其他延火中に斃られたる者少なきにあらず其姓名左の如し

水郷區鴻島四丁目三番地平民（勤工場燒死） 伊藤 正次郎（二十七）
美土代町一丁目廿一番地東京府平民鳶職（途上燒死） 長谷川金太郎（三十五）
神田區三河町二丁目廿四番地（壓死） 小川佐右衛門
同區錦町一丁目十九番地ゟ於て（逆上燒死） 宿所姓名不詳一名
同區錦町一丁目三花屋（途上燒死） 森田 三次郎
同區岩本町十二番地東京府平民（古着商） 江奥 幸吉
同區東龍閑町九番地平民石津平七養子（古着商） 石津 幸吉（二十七）
同前石津平七方屋人 四山 和助（二十）
同區元柳原町四十二番地（古着商）福田忠兵衛方屋人 川崎 鶴太郎（二十一）
同區淺草神保町七番地平民計粉屋伊佐宗七養女（自宅燒死） 伸佐 スエ（十二）
京橋區中橋廣小路九番地平民（糸物商） 三ツ木 張吉（三十一）
日本橋區本銀町二丁目九番地東京府平民（染物商） 飯山 和助（三十一）
同區久松町八番地東京府平民和田龜次郎方 小和田 留吉（十七）
神田區猿楽町二丁目一番地 松本 幸吉（三十五）
小石川區中富坂町五番地東京府平民（雜業） 神谷 岩吉（五十五）
神田區錦楽町一番地東京府平民（食店客本間織藤） 客本 ヵツ（五十六）

図６ 洽集館火災被害者のリストの一部
（東陽堂『風俗画報』（41））

ただし以上の詳細は、扱う情報量が多くなってしまうため、時間の関係上記事に反映させることはできなった。またイラストについてはその時点では著作権上の懸念を完全には払しょくできなかったためアップロードできていない。南明倶楽部に関しては、大正デモクラシーの運動のなかで決定的なターニングポイントとなった吉野作造による演説が南明倶楽部で行われていた、という事実も分かったが、これも時間の関係上取り上げることはできなかった。

２－２．広報と本番準備

資料調査と並行して、イベント管理プラットフォームの Peatix を利用し広報を開始した。またワークショップ本番で実施する取材をかねた街歩きのルートの選定も進めていった。取り上げるトピックの周辺地域の歴史ある建物を調べ、リストにしながら往復一時間を目安に候補を考えていった。災害というテーマとの関わりや、また神保町、神田地域の歴史に触れることができる場所を中心に、会場→神田錦町更科→五十稲荷神社→麻雀木屋→震災記念の碑→淡路公園というルートを策定した。広報開始がワークショップ本番の一か月前とギリギリとなってしまったが、Peatix 上では８名の参加者が集まった。

２－３．ウィキペディアタウン当日

ワークショップ開始の１時間前に集合し、会場の設営をしたのち、参加者の受付を行った。以下が当日のタイムテーブルだ。

10:00 – 10:15　受付
10:15 – 10:50　イベント趣旨説明およびウィキペディアの編集についての解説
10:50 – 12:00　フィールドリサーチ／記事用の写真撮影
12:00 – 13:00　昼食休憩
13:00 – 15:30　記事執筆
15:30 – 16:00　記事講評／振り返り
16:00　解散

当日欠席者が出た関係で、学生スタッフも執筆メンバーに加わることとし各チーム４名ずつの８名で執筆作業に当たることにした。以前のウィキペディアタウンに参加してくれたことのある参加者も何名かいたが、日常的にウィキペディアの記事執筆にかかわっている参加者は１名だけであった。はじめてウィキペディアの記事を編集する、という参加者も１名いた。残りの参加者は、記事を編集したことはあるがあまりはっきりとは覚えていない、というレベルであった。

10 時の定刻からワークショップ開始し、趣旨説明ののち、ファシリテーターである Araisyohei 氏によるオリエンテーションおよび谷島貫太二松学舎大学准教授による題材についての説明が行われた。あわせて参加者の簡単な自己紹介と、挙手制でどちらの記事を執筆するかを決めるグループ分けを行った。

街歩きに際しては、事前にルート上に位置する場所の過去の写真などを集めた資料を配布した。

図７　街歩き用に共有した写真①（神田の大火被災前の東京堂）

図８　街歩き用に共有した写真②
（神田の大火被災後の東京堂）

その配布資料も参照し、スタッフによる説明をはさみつつ時折立ち止まりながら約一時間かけて淡路公園までたどりついた。今回扱うトピックの一つである南明館はすでに存在しないので、かつて建物が立っていたはずの場所を確認することしかできなかったが、明治時代のイラスト上で南明館の隣に書かれている五十稲荷神社はいまも存在するため、そこで少し時間を使って写真を撮った。淡路公園については、ワテラスに併設され公園としてはかなり変わった敷地の形をしているため、どの地点からどのアングルで写真を撮るのがいいか試行錯誤しながらの撮影となった。淡路公園で昼食休憩解散となり、13 時に会場に各自集合して午後の作業を開始していった。

図９　街歩きの様子 ①

図 10　街歩きの様子 ②

午後の記事執筆作業では、グループごとに参考記事なども探しながら記事の構成案を組み立てていくところからスタートした。事前にある程度想像していたことだったが、今回取り上げた二つのトピックでは、「淡路公園」の方が記事構成の難易度が高いようだった。「南明館」は、時系列で出来事をまとめていけばひとまずまとまった記事になりそうだが、「淡路公園」については、淡路小学校や開成中学校など、深く関係はするけれど主題とは異なる事柄をどのように「淡路公園」という枠組みのなかに組み込んでいくのか、という点で構成上の工夫が必要になるからだ。幸い、ウィキペディアの記事執筆経験が豊富な参加者が、そのあたりもくみ取って「淡路公園」チームに加わってくれたので、そのリードのもと記事構成案がつくられていった。

図 11　作業の様子

図 12　机の上に用意された資料群

記事の構成案ができると、今度は担当を決めて関連資料を読み込むフェーズに移る。各テーブルには付箋が用意されており、ファシリテーターの Arais y ohei 氏から、資料内の必要な情報を資料の出典情報とあわせて付箋に書き込んでいくようアドバイスがなされる。参加者が黙々と資料を読み進めていくなか、様子を見てスタッフが参考になりそうな資料を紹介していく。ホワイトボードに整理された各記事の構成表の各パートに、情報を書き込まれた付箋が貼り付けられていく。ときおり聞こえてくる独り言は、資料のなかに使えそうな情報が見つかった合図か、あるいは執筆する文章のイメージを作り上げていく際の脳内の情報処理が発する音だ。だんだんと機が熟してくる。いつのまにか参加者たちがキーボードに文字を打ち込んでいく音が大きくなっていく。

ウィキペディアタウンは後半になればなるほど加速していくスロースタートの中距離走のようなもので、参加者たちが実際に文章を書きはじめた時にはほとんどラストスパートに入っている。気づくと講評開始の予定時刻まで 30 分を切っている。記事の公開作業は、まずは入れ物となる新規記事を用意するところから始められる。そのあとに編集競合を避けるために声掛けをしながら、順番に記事を構成していく。各メンバーが用意していったパーツが組みあがっていく。記事の輪郭がだいたい出来上がっていったところで、撮影してきた写真もウィキメディアコモンズにアップロードし記事に読み込む。地味に時間がかかるのが出典情報の追加だ。ファシリテーターのサポートを受けながら注を付け、出典情報を書き込んでいく。数字の表記の統一がされていないことに気づき、こちらも修正していく。

予定時刻より 30 分ほど遅れて講評パートに入る。それぞれ記事自体はすでに形になっているが、講評の準備を進めていく背後でもまだキーボードを叩く音が響いているのもいつもの光景だ。各チームごとに代表者を決め、記事の内容について説明していってもらう。経験上、チームの最年少メンバーが代表者になることが多い印象だが、今回もそうだった。大学一年生と二年生の参加者が、それぞれ簡単な報告をしていく。どちらの記事も、しっかりと構成され、出典情報も丁寧に付された内容となった。

図 13　ウィキペディア記事「淡路公園」

図 14　ウィキペディア記事「南明館」

３．まとめ

通常、過去の災害の記憶は時間が経てば一部の碑などを除いて日常生活からは見えないところにしまいこまれる。復興のプロセスには「忘れること」も含まれているからだ。しかし同時にわたしたちは、折に触れて災害のことを思い出さなければならない。災害は忘れたころにやって来るのだ。今回実施した災害をテーマとしたウィキペディアタウンは、いわばワークショップ形式での災害の想起の試みであったと言える。扱ったトピック自体は災害に直結する事柄ではなかった。しかし、公園（さらには小学校）と商業施設という、わたしたちの日常生活を当たり前に支えてきた場所の歴史を掘り下げていくと、コツンと災害の記憶を掘り当ててしまうという事実は、ともすると遠くに感じられてしまう災害という出来事の実際の近さを思い知らせてくれる。

ウィキペディアタウンというワークショップの強みの一つは、作業の成果がウィキペディアの記事という形で公開され、残りつづけていくという点にある。今回掘り出された災害の記憶は、ウィキペディアの記事という少し特殊な形態で、ネット上でアクセス可能な石碑となった。さらにはその記事を実際に書いた参加者たちの手には、その石碑を立てた労働の感触が残っているはずだ。その感触は、自分がほとんど忘れていた、さらにはそもそも知りもしなかったかもしれない災害の記憶に触れた、少し生々しい感触でもある。

※参考資料

ウィキペディアタウン in 秋葉原 vol.5 資料リスト

〇淡路公園

・淡路公園

「淡路町二丁目西部地区第一種市街地再開発事業」

https://www.toshiseibi.metro.tokyo.lg.jp/cpproject/field/awaji/saikaihatsu1_13.html

都市再生における官民連携による都市計画制度に関する研究 ： 都市再生特別地区の実態と課題

https://researchmap.jp/kitaza10/published_papers/19519510/attachment_file.pdf　(p.119-121)

『新都市』49(7)(582),都市計画協会,1995-07. 国立国会図書館デジタルコレクション

https://dl.ndl.go.jp/pid/2737296

→昭和３０年代に公園の面積が半分になったとの記述

・震災／復興小公園

小林正泰　『関東大震災と「復興小学校」』　勁草書房　2012

小沢健志　『写真で見る関東大震災』　筑摩書房　2003

神田万世橋まち図鑑制作委員会　『神田万世橋まち図鑑　東京ルーツ！神田のまち巡り 40』　株式会社フリックスタジオ　2014

松葉一清　『「帝都復興史」を読む』　新潮社　2012

末松四郎　『東京の公園通誌　下』　郷学舎　1981

土居利光　『東京都における公園緑地計画の系譜Ｉ』　東京都公園協会　2009

・淡路小学校

東京都千代田区　『新編　千代田区史　区政史資料編』　東京都千代田区　1998

東京都千代田区　『新編　千代田区史　区政史編』　東京都千代田区　1998

千代田区教育委員会　『千代田区教育百年史-別巻』　千代田区　1980

千代田区立淡路小学校『淡路　風土記――創立』創立百十周年記念誌部 1986
東京都千代田区立淡路小学校『あわじ』東京都千代田区立淡路小学校 1976
東京都千代田区立淡路小学校『淡路の百年』東京都千代田区立淡路小学校 1975
『復興新築校舎落成記念』東京市淡路尋常小学校／編 ― 東京市淡路尋常小学校 ― 1927
東京市編『東京市教育施設復興図集』, 勝田書店, 昭和 7. 国立国会図書館デジタルコレクション
https://dl.ndl.go.jp/pid/1280159

・開成中学

開成学園九十年史編纂委員会編『開成学園九十年史』, 開成学園, 1961. 国立国会図書館デジタルコレクション
https://dl.ndl.go.jp/pid/9544122
高橋是清 述『半生の体験 ： 世に処する道』, 今日の問題社, 昭和 11. 国立国会図書館デジタルコレクション
https://dl.ndl.go.jp/pid/1105660
KANDA ルネッサンス出版部『神田まちなみ沿革図集』久保工務店　1996

〇南明館

・洽集館

建築学会 編『明治建築座談会』第 2 回, [建築学会], [昭和 8]. 国立国会図書館デジタルコレクション
https://dl.ndl.go.jp/pid/1178734
東京市編『東京市史稿』変災編　第 5, 東京市, 大正 6. 国立国会図書館デジタルコレクション
https://dl.ndl.go.jp/pid/1915694
三省堂編輯所 編『日本百科大辞典』第 3 巻, 大日本百科辞典完成会, 明 41-大 8. 国立国会図書館デジタルコレクション https://dl.ndl.go.jp/pid/898067
『風俗画報』(41), 東陽堂, 1892-05. 国立国会図書館デジタルコレクション
https://dl.ndl.go.jp/pid/1579469
東京の消防百年記念行事推進委員会 編『東京の消防百年の歩み』, 東京消防庁, 1980. 6. 国立国会図書館デジタルコレクション https://dl.ndl.go.jp/pid/9583970
萩原一郎 [著]『建築火災における避難安全規定の研究』. 国立国会図書館デジタルコレクション
https://dl.ndl.go.jp/pid/3127991
KANDA ルネッサンス出版部『神田まちなみ沿革図集』久保工務店　1996

・南明館

水田健之輔 著『本朝商業広告史』, 巌松堂書店[ほか], 昭和 3. 国立国会図書館デジタルコレクション
https://dl.ndl.go.jp/pid/1181223
村上直治郎 著『最新女子記事文範』, 実用女学校出版部, 明 39. 6. 国立国会図書館デジタルコレクション
https://dl.ndl.go.jp/pid/866676
『東京市統計年表』第 3 回, 東京市, 明 36-44. 国立国会図書館デジタルコレクション
https://dl.ndl.go.jp/pid/806545
遠藤元男 編『江戸東京風俗誌』, 至文堂, 1963. 国立国会図書館デジタルコレクション
https://dl.ndl.go.jp/pid/9544364
加藤蕙 著『みつめた東京百年』, 圭文館, 1966. 国立国会図書館デジタルコレクション
https://dl.ndl.go.jp/pid/2988630
森集画堂編輯部 編『東京案内』, 森集画堂, 明 42. 6. 国立国会図書館デジタルコレクション
https://dl.ndl.go.jp/pid/764075

『千代田区史』中巻, 千代田区, 1960. 国立国会図書館デジタルコレクション
https://dl.ndl.go.jp/pid/3010324
鈴木理生『明治生まれの町　神田三崎町』青蛙房, 1978
平野光雄 著『明治・東京時計塔記』, 明啓社, 1968. 国立国会図書館デジタルコレクション
https://dl.ndl.go.jp/pid/2518855（参照 2023-01-29）※個人送信
南亮一「ショッピングセンターの原型・勧工場の隆盛と衰退」法政大学イノベーション・マネジメント研究センター（『法政大学イノベーション・マネジメント研究センター　ワーキングペーパーシリーズ』234, 2020）

・樋口一葉
馬場孤蝶 著『明治文壇の人々』, 三田文学出版部, 昭和17. 国立国会図書館デジタルコレクション
https://dl.ndl.go.jp/pid/1127237（参照 2023-01-31）
林順信『東京市電名所図絵　総天然色石版画・絵葉書に見る明治・大正・昭和の東京』JTB, 2000

・南明倶楽部
麻生久 著『黎明』, 新光社, 大正13. 国立国会図書館デジタルコレクション
https://dl.ndl.go.jp/pid/979359（参照 2023-01-31）
田中惣五郎 著『吉野作造 ： 日本的デモクラシーの使徒』, 未来社, 1958. 国立国会図書館デジタルコレクション https://dl.ndl.go.jp/pid/2984048
菊川忠雄 著『学生社会運動史』, 中央公論社, 昭和6. 国立国会図書館デジタルコレクション
https://dl.ndl.go.jp/pid/1181643
藤井誠治郎 著 ほか『回顧五十年』, 藤井誠治郎, 1962. 国立国会図書館デジタルコレクション
https://dl.ndl.go.jp/pid/3047992

・南明座
十重田裕一　『コレクション・モダン都市文化　第19巻　映画館』　ゆまに書房　2006
キネマ旬報社　『映画館のある風景　昭和30年代盛り場風土記・関東篇』　キネマ旬報社　2010
東京都千代田区　『新編　千代田区史　通史編』　東京都千代田区　1998
森まゆみ　『町の履歴書　神田を歩く』　毎日新聞社　2003
神田公園地区連合町会　『大好き神田2003　神田を歩こう』神田公園地区連合町会　2003
千代田区区民生活部　『江戸・東京の歴史をたずねて　千代田まち事典』　千代田区区民生活部　2005
『キネマ週報 = The movie weekly』(6), キネマ週報社, 1930-03. 国立国会図書館デジタルコレクション
https://dl.ndl.go.jp/pid/7965005
『キネマ旬報』(171), キネマ旬報社, 1924-09. 国立国会図書館デジタルコレクション
https://dl.ndl.go.jp/pid/7904435
『キネマ旬報』(533)(1347), キネマ旬報社, 1970-10. 国立国会図書館デジタルコレクション
https://dl.ndl.go.jp/pid/7905603
『キネマ旬報』(534)(1348), キネマ旬報社, 1970-10. 国立国会図書館デジタルコレクション
https://dl.ndl.go.jp/pid/7905604